

第1回 ライトノベル作法研究所主催 大夏祭り大会 選評評価シート

作品名: 「夏の隙間にぼくは思う」

テーマ: 「死んでいるのに生きている美少女」

キャラクター

75

ストーリー

67

テーマ(設定)

82

文章力

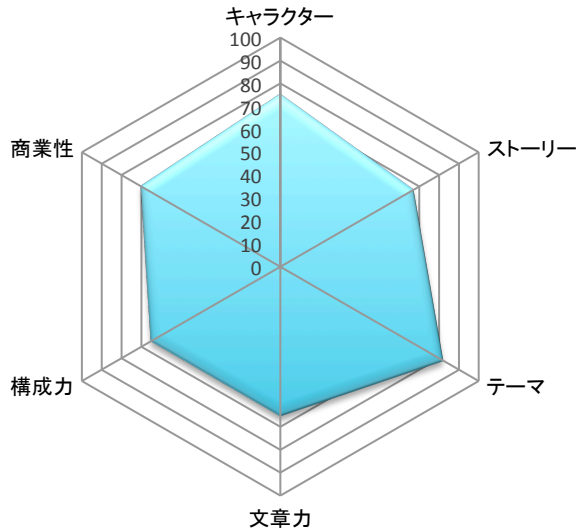
65

構成力

65

商業性

70



・細かな点として、特に注意すべき点は見当たらない。

・総評

「ズレ」「隙間」といったはっきりとした定義のない設定は、人によって「この曖昧な世界観が逆に好み」という方もいると思われる一方で「隙間ってなんだよはっきりしてくれ」という方もいると思われる。ただこの作品の良い点は前者の「曖昧な世界観が好きの人」に対しては100%面白いと感じさせることが出来ている点にあるので気にする必要はないと感じる。個人的にもこの曖昧な世界観は読んでいて非常に引き込まれるものがあった。更に言ってしまうと、一定の固定客は確実に確保できる作品を書けるという意味では、作者様はプロになるための才能を十二分に持っていると考えられる。強いて作品を批判するならば、結構な頻度で「説明し過ぎ」な箇所が伺える。例えば、

①

「時給、いくらです？」一応訊いてみる。まさか、マックより安いってことはないだろう。すると、めぐみさんはにっこり笑って、「マックと同じぐらいは出すわ」と言った。

②

「時給、いくらです？」一応訊いてみる。めぐみさんはにっこり笑って言う。「マックと同じぐらいは出すわ」

これとこれのどちらがパッと見て面白くみえるかという問題。一般的には、同じ情報量をもった文章ならば量が少ない方が面白く感じ易くなることが多い(絶対ではなくあくまで傾向として)ため、その点を意識して作品を描ければ文章量の節約にもなり、さらにその余った文量で世界観を深められればより面白い作品になったのではないかと感じる。この作品を見る限り設定作りや描写力に問題は全くないので、あとはそこからいかに余計な文を引いていくかの引き算の美学を大切にしたい。また話は変わり、非常に魅力的だったのがキャラクター。死体を探して欲しいという美少女薊のミステリアスな雰囲気はこの作品の世界観とまさにマッチしていて、キャラクター性とテーマ性のお互いのお互いを生かし合っているように感じた。ただ強いてあげるならば、合計三人の女の子(双子+薊)がかなり似通っているため、この三人の特徴付けをより明確にしてほしかったという点はある。例えば双子という設定を年の近い姉と妹ということにすれば、姉と妹とその幽霊(?)ということキャラクターライズがしやすかったのではと感じる。

合計加点ポイント: 0

総得点: 424 / 600

B方式総合得点: 29963 点